フロントランナー
Front Runner

命に関わる仕事をしているからと、時折見せる硬い表情の中に真剣なまなざしが際立つ＝東京都千代田区

「平和づくり」現場主義で

上智大学教授
東（ひがし） 大作（だいさく）さん（49歳）

シリア、イラク、南スーダン……。戦いで荒れ果てた国に、平和で穏やかな生活を取り戻す手伝いをしたい。ジャーナリスト、研究者、国連政務官、日本の外交官、また研究者と立場を変えながら、平和構築に関わり、具体的な政策提言を続けている日本人は、ほかにいない。

徹底した現場主義だ。一昨年は南スーダンを、昨年はシリアを、今年はイラクと南スーダンを対象に、どうしたら平和が持続できるかを現地や周辺国で調査した。難民や政権幹部だけでなく、反政府勢力の幹部とも対話し、国連や各国政府、研究機関などに向け政策を発信する。例えば、識字率が世界最低とされる南スーダンでは、国家運営の要となる行政官を養成する教育機関を隣国に設け、異なる部族が共に学ぶことで部族間の和解を促す支援策を提案、日本政府が検討中だ。

国連開発計画の近藤哲生駐日代表は「机上の空論でなく、現地の実情を反映した提言に評価が高い。発信力も随一だ」という。初の米朝首脳会談が開かれた日も、国連本部に近い世界最大の平和研究機関・国際平和研究所で、国連幹部らを前に基調講演をしていた。

転機は35歳。イラク復興に関する番組などで賞を受け、脂が乗っていた時にNHKを退職。両親の広島の被爆体験をきっかけに、平和に貢献する仕事につくのが幼い頃からの夢。それを果たすため、国連で働く最低条件である修士の学位を取ろうとカナダの大学院に入り直した。

奨学金と貯金で研究しながら国連本部にも通い、人脈を広げた。2008年、アフガニスタンで大規模調査を行い、反政府武装勢力タリバーンとの和解を望む声が部族を問わず大多数であると、初めて明らかにした。

調査はタリバーン掃討作戦を続ける米国の姿勢も変えた。翌年、国連のアフガン支援ミッションの政務官に就き、実務責任者として和解最高評議会や、日本政府が50億円を拠出した和解基金設立の舞台裏を担った。

掲げる主張は一貫している。国民から信用され争いが再発しない政府をつくるには、特定の政治勢力を排除せず、可能な限り広範な集団が参加する「包摂性」を保つことが重要だ。14年に国連の日本政府代表部公使として、和平調停に関する国連決議に包摂性の重要さを盛り込むよう奔走し、実現させた。

気になるのは、膨大な負担金を払いつつ、紛争地の国連の平和維持活動などに日本人の上級職員が極端に少ないこと。「平和国家日本の信用は高く、日本の主張には素直に耳を傾けてくれる。日本は、対立する集団同士の対話の促進役という新しい役割を果たすべきです」

文・畑川剛毅　写真・池永牧子

◀3面に続く

ご意見・ご感想はbe@asahi.com

「平和運動の指導者か野球監督が夢でした」

フロントランナー Front Runner

（1面から続く）

東 大作さん 上智大学教授

――国連の政務官、外交官、大学教授と、華麗な経歴ですね。

無我夢中で努力したのは確かですが、平和構築に携わる職に居続けられたのは結果に過ぎません。転身した時は希望の職に就ける保障は全くなく、本当に思い切った決断でした。政務官に採用された時、大学院生としての苦闘を間近で見ていた息子が「夢を追い続ければかなうことが、パパを見ていて分かった」と言ってくれて、涙が出ました。

――番組制作者として評価されていたのに、なぜ。

本当に就きたい平和づくりの仕事に、今挑戦しないと、死ぬ時に必ず後悔すると思ったからです。

体験語れない父

両親の広島での被爆体験が決定的でした。母の家は爆心地から2・4キロ。爆発の瞬間、部屋の端から端へ吹き飛ばされ、4歳だった母は伯母に背負われ、いったん爆心地方向へ逃げました。火事がひどく、皮膚が垂れ下がった人や眼球が飛び出た人が逃げてくる。伯母が、祖母を必死で止めて逆方向に逃げ、助かりました。逆に父は一度も話したことがない。悲惨すぎて、話せないのだと思います。

祖父は反核運動の闘士となり、私も伯母から体験談を繰り返し聞き、平和に関わる仕事がしたいと思いました。小学校の文集の「夢」は、平和運動の指導者か少年野球の監督でした。

――アフガンでの調査が高く評価されました。

博士論文を書くための調査を3カ所で行いました。タリバーンが盛り返している途上で、南部カンダハール州では、国連の事務所とホテル以外は動けないほど治安が悪かった。村人たちに集まってもらい、直接話を聞きました。「平和を確立するために一番大事なことは」と問うと、タリバーンに反発する人が多い北部でも、9割近くが「タリバーンも含む反政府武装勢力との和解」と回答。地域に関係なく圧倒的多数が個別の国より国連を信頼していることも分かった。それでアフガン和平はタリバーンとの和解が不可欠で、国連が橋渡しをすべきだと提言。国連アフガン支援ミッション代表が「和平戦略を考える上で最重要の報告」と絶賛してくれました。

――自ら提案書を持って関係者を説得したとか。

まず日本政府が和解基金に50億円の拠出を決定、これを受けた米国もタリバーンとの和解に踏み出した。

――タリバーンは米国が駆逐した反政府勢力です。

10万人の米軍がいてもタリバーンの勢いは増すばかり。オバマ政権に代わり米国は戦略の見直しを迫られていた。民生支援の先頭に立つ日本も更なる施策を模索中。素地はありました。

カブールに国連政務官として赴任し、半年余りで和解の枠組みが整いました。自らの提言を、実務者として実現できたのは本当に幸せでした。ただ、水面下で対話が続いているものの、9年たっても和解が実現していないのも事実です。

排除せずが鉄則

――平和構築には包摂性が重要だと訴えています。

永続的な平和を求めるなら、国際テロ組織を除き、最初から特定の集団を排除してはいけない、排除すると持続的な政権はできないと10年間言い続けて、ほぼ国際的なコンセンサスが得られたと思います。

フセイン政権後のイラクが分かりやすい。一時、安定しましたが、選挙で選ばれるのは人口の7割を占めるシーア派。フセイン時代に遇されていたスンニ派は排除され、イスラム国が台頭する原因になりました。

――シリアは、アサド政権が領土の9割を回復しました。そんな国にも反政府勢力と対話しろ、包摂性が大事だと言う意味がある？

このまま安定するか分かりません。数年後にまた不安定化し、膨大な戦費が必要になるかもしれない。シリアを支援するロシアも包摂性の大切さを理解し、本音は反体制派との対話を望んでいます。国際社会が特定勢力を排除するなと言い続けることが大切です。

――日本は「国際的な対話の促進者」に、とも。

戦後、海外で誰一人傷つけず、地道な支援を続けてきた日本への信頼を肌で感じる。難民も紛争国の政治家も「日本人なら」と素直に聞いてくれる。国連でもそうです。日本の提言を政治的疑念を持たれずに受け止めてくれる傾向がある。

拙速に結論を出すのではなく、対立する人々に対話を呼びかけ、促す。日本にしかできない役割です。

――国内での活動は。

来年3月まで、福島・いわき沖で浮体式洋上風力発電の実証実験が続きます。東日本大震災の直後に、東大の石原孟教授にアイデアをお聞きし、私が地元に呼びかけました。途中、漁業者が「我々から海を奪うのか」と猛反発した時、仲介役を買って出ました。漁業者も含めた意思決定機関・共働委員会を設け、当事者として加わってもらう形を提案して賛成を得ました。アフガンで学んだ包摂性の実践の場でした。

東ティモールへのスタディーツアーに参加した学生やOGと再会。活発な会話に、思わず笑顔がこぼれた＝東京都千代田区

プロフィル

★1969年、東京生まれ。高校時代まで軟式野球に熱中。高3の春の関東大会で優勝。

★東北大卒業後、93年NHKディレクターに。「犯罪被害者をどう守るのか」、「我々はなぜ戦争をしたのか」（放送文化基金賞）、「イラク復興 国連の苦闘」（世界国連記者協会銀賞）などを制作。

★2004年、退職してカナダ・ブリティッシュコロンビア大学大学院に入学。08年、アフガンで現地調査＝写真。

★09年末から1年間、国連アフガン支援ミッションの政務官。11年、東京大准教授。

★12年から2年間、国連の日本政府代表部公使参事官。東大に戻り16年に上智大へ。今年2月、イラク・マリキ副大統領と懇談＝写真。

★NHKの同僚だった妻と息子の3人家族。10代で発症した腰痛対策に、毎日、腹筋運動と独自の体操を欠かさない。

◆次回は、公募した若いクライマーとヒマラヤの未踏峰や未踏ルートに挑む世界的な登山家、花谷泰広さん。既存の山岳会と違う山の組織づくりを目指しています。

街のB級言葉図鑑